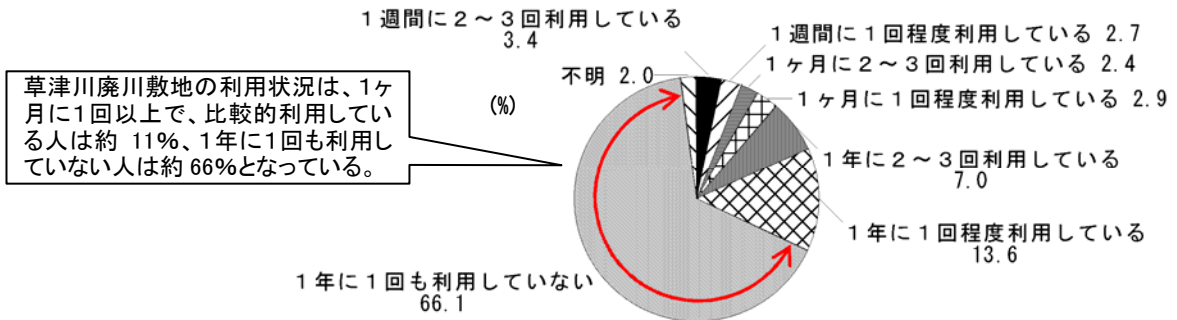
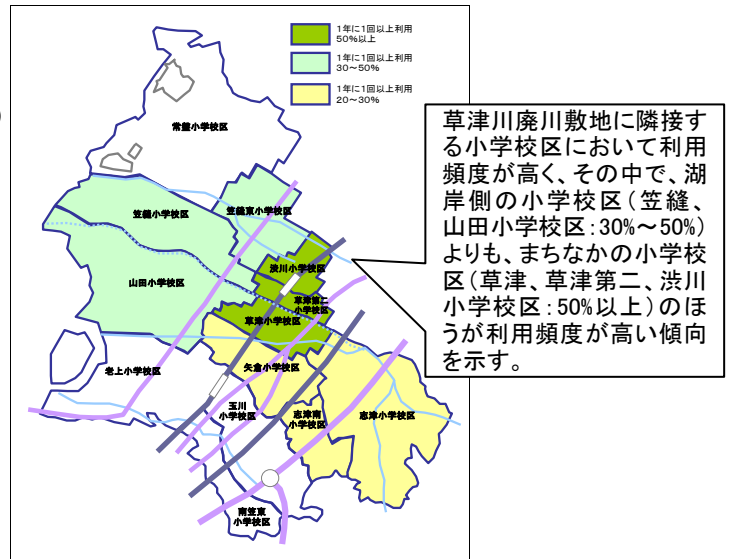
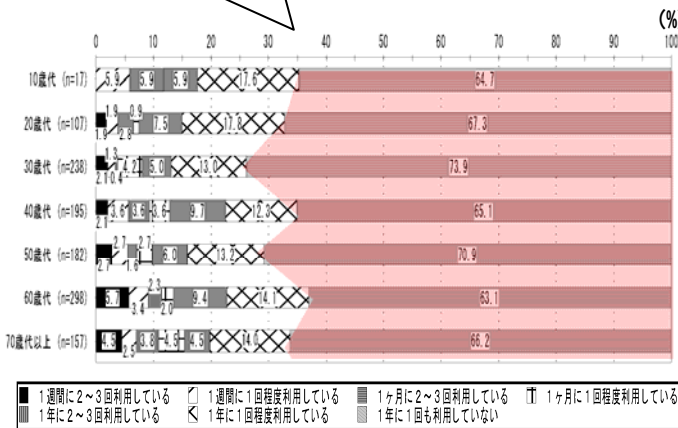


(3)草津川廃川敷地

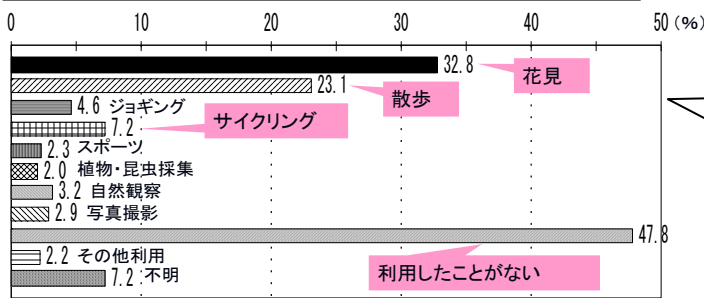
草津川廃川敷地の利用頻度



年齢層による草津川廃川敷地の利用頻度のちがいは見られなかった。

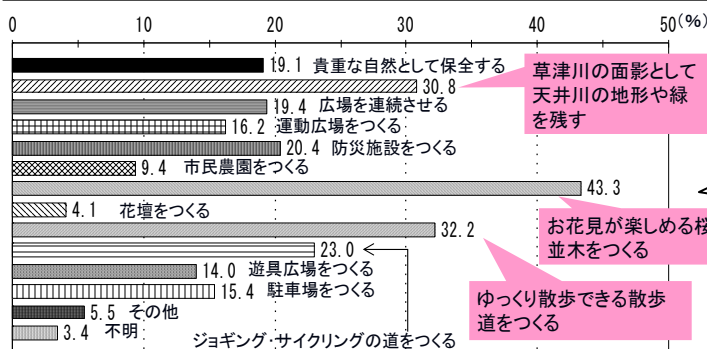


草津川廃川敷地の利用目的



草津川廃川敷地を利用する目的として、花見が約 33%で最も多く、次いで、散歩が約 23%であった。また、利用したことがない人が約 48%を占めている。

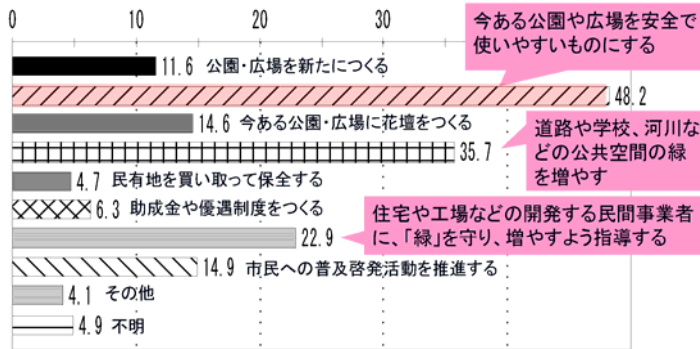
草津川廃川敷地の一部を公園・緑地にする場合の意向



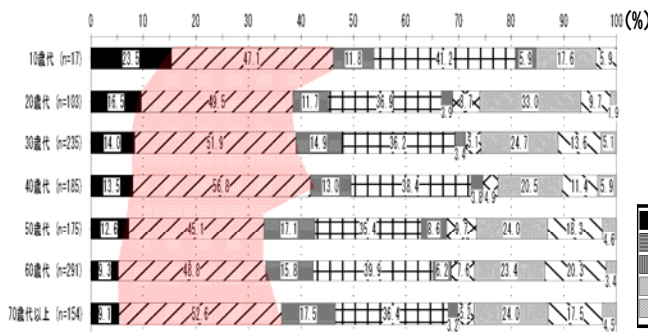
草津川廃川敷地の一部を公園・緑地として利用する場合の意向としては、お花見が楽しめる桜並木を望む割合が約 43%で最も多かった。次いで、ゆっくり散歩できる散歩道が約 32%、草津川の面影として天井川の地形や緑を残すが約 31%であった。

(4) 緑のまちづくり

緑のまちづくりのために必要と感ずる取組み



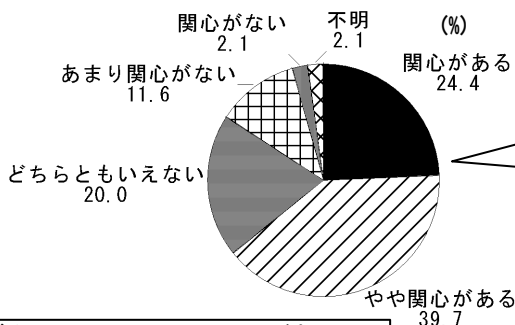
緑のまちづくりに必要な取組として、「公園などを新たに作る」の約 12%に対して、約 48%の人が「今ある公園や広場を安全で使いやすいものにする」と回答している。また、道路や学校、河川などの公共空間の緑を増やすことが約 36%、住宅や工場などの開発する民間事業者等に、緑を守り、増やすよう指導することが約 23%であった。



緑のまちづくりに必要な取組として、今ある公園や広場を安全で使いやすくすることを望む割合は、各年齢層で多いが、中でも40歳代が約57%で最も多かった。

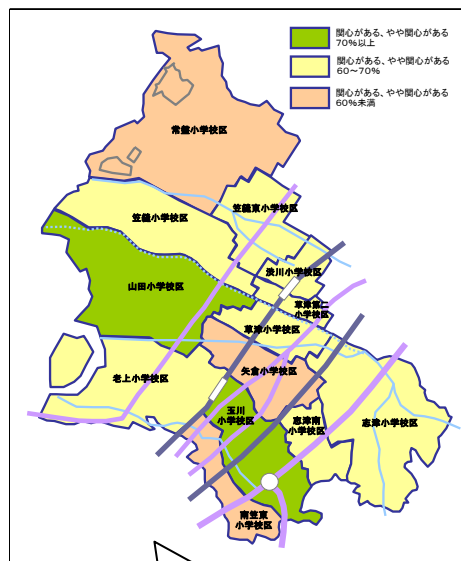
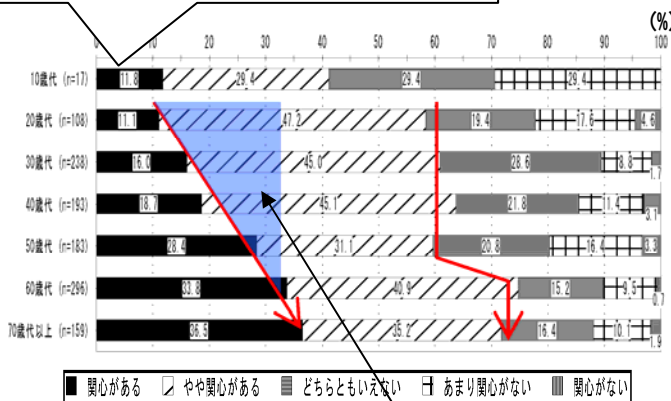
- 公園や広場を新しくつくる
- 今ある公園や広場に花壇を増やす
- 樹林地などの民有地の緑を買い取って保全する
- 住宅や工場などの開発する民間事業者等に、「緑」を守り、増やすよう指導する
- その他
- 今ある公園や広場を安全で使いやすいものにする
- 道路や学校、河川などの公共空間の緑を増やす
- 民有地の緑化の推進のために、助成金や優遇制度などをつくる
- 市民の緑化意識や環境意識を高める普及啓発活動を推進する

緑のまちづくり活動に対する関心



緑のまちづくり活動に対する関心度は、関心がある(関心がある+やや関心がある)が約 64%を占めていた。関心がない(関心がない+あまり関心がない)は約 14%にとどまっていた。

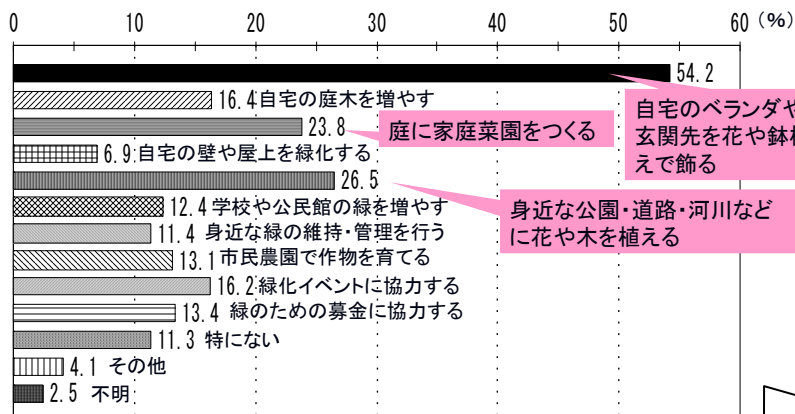
緑のまちづくり活動に対しては、関心がある(関心がある・やや関心がある)割合は、20~50歳代で約58~64%と高く、更に60歳代・70歳代以上では70%以上が関心を示しており、高年齢層の市民参加への取り込みが重要であることを示唆している。



比較的関心度が高い(70%以上)小学校区は、山田、玉川小学校区であった。逆に、比較的関心度が低い(60%未満)傾向にある小学校区は、常盤、矢倉、南笠東小学校区であった。

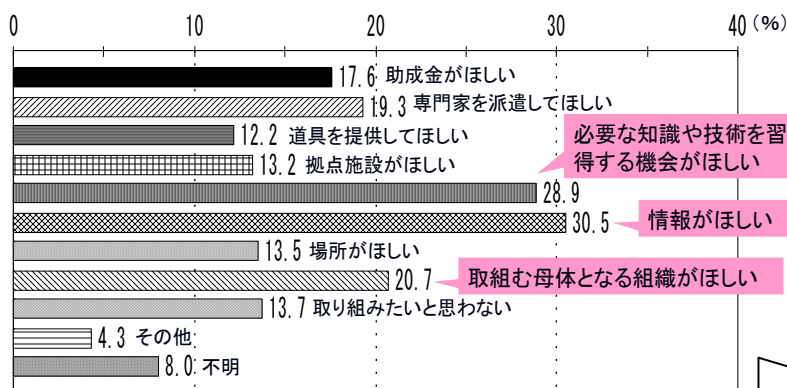
「関心がある」人は、年齢層が高くなるほど高い比率となる。20~50歳代の人、現在のところ、「やや関心がある」が、他にも関心がある、あるいは時間的な余裕がない、といった人々とも考えられる。

緑のまちづくり活動として取り組んでみたい活動



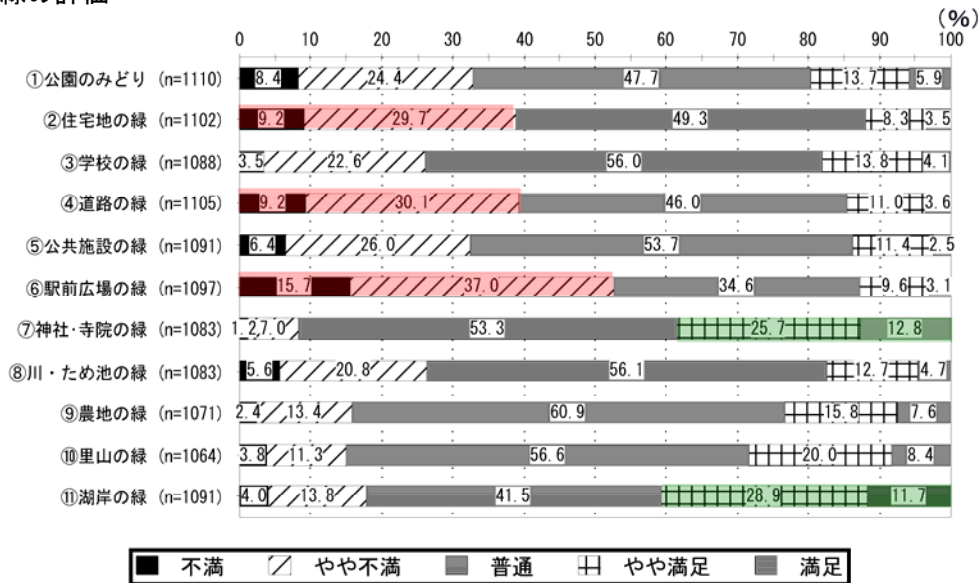
緑のまちづくりの中で取組んでみたい活動は、自宅のベランダや玄関先を花や鉢植えで飾る活動が約54%で最も多かった。次いで、身近な公園・道路・河川などに花や木を植える活動が約27%、庭に家庭菜園をつくる活動が約24%であった。

緑のまちづくり活動に取り組むための条件



緑のまちづくり活動に取り組む条件としては、情報を望む割合が約31%で最も多かった。次に、必要な知識や技術を習得する機会を望む割合が約29%であった。

(5) 緑の評価



- 最も満足度が高い緑(満足+やや満足)は、湖岸の緑で約 41%であった。次いで、神社・寺院の緑が約 39%であった。
- 最も不満の多い緑(不満+やや不満)としては、駅前広場の緑で約 53%であり、次いで、道路の緑及び住宅地の緑が約 40%であった。

3) 小学校区別の市民意識調査結果の整理

市民意識調査の結果は、市街地と郊外部、あるいは湖岸寄りと山手丘陵地側では傾向が異なることから、地域の特徴を整理するために、小学校区別の集計を行って、その特徴を整理することとしました。

その結果を表 2-7 に整理しました。



表2-7 小学校区別の市民意識調査結果の整理

小学校区	緑の現状と課題	市民の意識調査結果	まとめ
志津	山手丘陵地の樹林や農地、ロクハ公園などといった豊かな緑の中に、集落地が分布している。また、工業地敷地内にも緑が確保されている。	緑は多いと感じている人が多いものの、最近10年で緑が減少したと感じている人は多い傾向が見受けられる。公園の利用頻度や緑のまちづくりへの関心など、全市の平均的な意見割合と同程度となっている。	山手丘陵地にあつて、昔ながらの集落の形態や生活様式が残されてきているが、一方で、宅地開発が進行してきた地区もある。アンケートの公園利用頻度や緑のまちづくりへの関心度は平均的な傾向を示すが、既存集落と新興住宅地の要素が平準化していることも考えられる。したがって、これらの地域の施策を検討する上では、その地区の特性（既存集落、新興住宅地など）を十分見極めることが重要である。
志津南	丘陵地の樹林のまとまった緑がある。また、近年、追分丸尾地区の土地区画整理事業によって緑が減少したが、若草地区のように緑豊かな住宅地も存在している。	緑は多いと感じている人が多く、最近10年で緑が減少したと感じている人は少ない傾向にある。公園の量・質の満足度は高い。	中心市街地を構成する地域であり、緑は少ないと感じている人が多い地域である。アンケートの緑のまちづくり活動への関心度が小学校区によって異なるが、これらの地域内でも、駅前と駅周辺、一戸建て住宅地と中高層マンション、家族と単身者の世帯など、居住場所や生活様式による様々なちがいを含んでいると考えられる。これらのまちなかの地域であっても、緑のまちづくりへの関心度は60~70%と高いと見ることができ、これらを市民参加のパワーに結びつけることも考えていく必要がある。
矢倉	市街化された住宅地であり緑は少ない。ただし、JR北西側には、草津川緑地、三ツ池運動公園等の緑の資源がある。地区としては、JR、国道1号、京滋バイパスで分断される。	緑は少ないと感じている割合が多く、最近10年で緑が減少したと感じている人も多い傾向が見受けられる。公園の利用頻度は低い傾向にある。また、他小学校区と比較して、緑のまちづくり活動への関心が低い傾向にある。	
草津	草津市役所等の公共施設、住宅地から構成される地区で、まちなかに緑は少ない。ただし、地区北側に草津川廃川敷地の緑が市街地の中の緑の資源として存在する。	緑は少ないと感じている傾向があるものの、最近10年で緑が減少したと感じている人は少ないという特徴がある。草津川廃川敷地の利用頻度が高く、その有効活用が望まれる。	
草津第二	JR草津駅を中心に中心市街地が形成され、まちなかに緑は少ない。ただし、地区南側に草津川廃川敷地の緑が市街地の中の緑の資源として存在する。	緑は少ないと感じている人の割合がやや多い傾向にある。まちなかではあるが、公園の利用頻度は渋川、矢倉小学校区と比較すると高い傾向。草津川廃川敷地の利用頻度が高く、その有効活用が望まれる。	
渋川	JR草津駅を中心に中心市街地が形成され、まちなかに緑は少ない。地区北側に葉山川がある。	緑は少ないと感じている人の割合が他小学校区よりも多い傾向にある。まちなかに位置し、公園の利用頻度が低い傾向にある。また、公園の量・質に対する何らかの不満を感じている割合が多い。	
玉川	JR南草津駅を中心とした新興市街地から、山手の牟礼までを含む多様な地区である。商業地、住宅地などの緑が少ない地区と、新名神高速道路の建設によって緑が減少したが、丘陵地には樹林が多く残されている。地区としては、国道1号、京滋バイパス、新幹線、名神高速道路で分断される。	最近10年で緑が減少したと感じている人がやや多い傾向が伺える。また、公園の質・量に何らかの不満を持っている割合が高い。緑のまちづくり活動への関心は、市域の中で最も高いという特徴がある。	アンケート結果から、公園の質・量に何らかの不満を持っている割合が高く、南笠東小学校区では公園の利用頻度が低い傾向が見られることや、緑のまちづくりへの関心度が地域でばらつくなどが特徴的である。これは、本地域内を交通動脈が通過し地域を分断していることや、工場、商業施設と近接または混在する住宅立地も多いなどの土地利用にも配慮しながら地域の施策を考えていく必要がある。
南笠東	名神高速北側は住宅地が主で緑は少ない。地区北側に狼川がある。地区としては、国道1号、京滋バイパス、新幹線、名神高速道路で分断される。	住宅地が多いにも関わらず公園の利用頻度が低い傾向が見受けられる。また、緑のまちづくり活動への関心が他小学校区に比べ低い傾向が見受けられる。	
老上	まとまった農地や湖岸緑地があり緑が多い中に、集落地が分布している。近年、新浜町地先での大規模商業施設立地、野路西部地区の土地区画整理事業によって緑が減少した。	緑の量の認識、公園の利用頻度、緑のまちづくりへの関心など、全市の平均的な意見割合と同程度となっている。	市街化区域から琵琶湖岸までの範囲をカバーする地域であり、まちなかの要素から昔ながらの集落形態までを包含している。アンケート調査結果も、両方の要素が平準化していると考えられる。（特徴的な意見の傾向が埋もれる。）したがって、これらの地域の施策を検討する上では、その地区の特性（既存集落、新興住宅地、中心市街地・商業地など）を十分見極めることが重要である。
山田	まとまった農地や湖岸緑地があり緑が多い中に、集落地が分布している。湖南幹線沿いの木川町地先では、近年、大規模商業施設によって緑が減少した。	緑は多いと感じている人はやや多い傾向を示す。ただし、公園の量・質に対する何らかの不満が、他小学校区よりも多い傾向が見受けられる。草津川廃川敷地の利用頻度がやや高く、その有効活用が望まれる。	
笠縫	まとまった農地や湖岸緑地がある西側と、住宅地を中心とした東側の地区から構成される。地区北部に葉山川、南部に草津川廃川敷地がある。また、緑の拠点として弾正公園もある。	緑は多いと感じている人はやや多い傾向を示す。公園の量・質に対する何らかの不満が多い傾向が見受けられる。草津川廃川敷地の利用頻度がやや高く、その有効活用が望まれる。	
笠縫東	まとまった農地と住宅地を中心とした市街地が隣接している。地区の中央を葉山川が流れる。	緑の量の認識、公園の利用頻度、緑のまちづくりへの関心など、全市の平均的な意見割合と同程度となっている。	中心市街地と郊外部の中間的な位置にあり、アンケート結果もこれを反映して、平均的な意見割合になっていると考えられる。
常盤	まとまった農地や湖岸緑地があり緑が多い中に、集落地が分布している。また、湖岸には、烏丸半島の水生植物公園みずの森、平湖・柳平湖など緑の拠点がある。	緑は多いと感じている人が多く、最近10年で緑が減少したと感じている人も少ない傾向が見受けられる。公園の利用頻度は、他小学校区よりも低い傾向にある。また、緑のまちづくり活動への関心が低い傾向が伺える。	昔ながらの集落の形態や生活様式が残っており、身近な緑は多いと感じられている。もともと、地域ぐるみの活動が行われており、改めて緑のまちづくりへの関心度の問いは現状になじまなかったと考えられる。



注) このアンケート調査におけるブロック別集計については、設問の中に学校の緑に関するところがあるため、「小学校区」別に集計しておりますので、御了承ください。

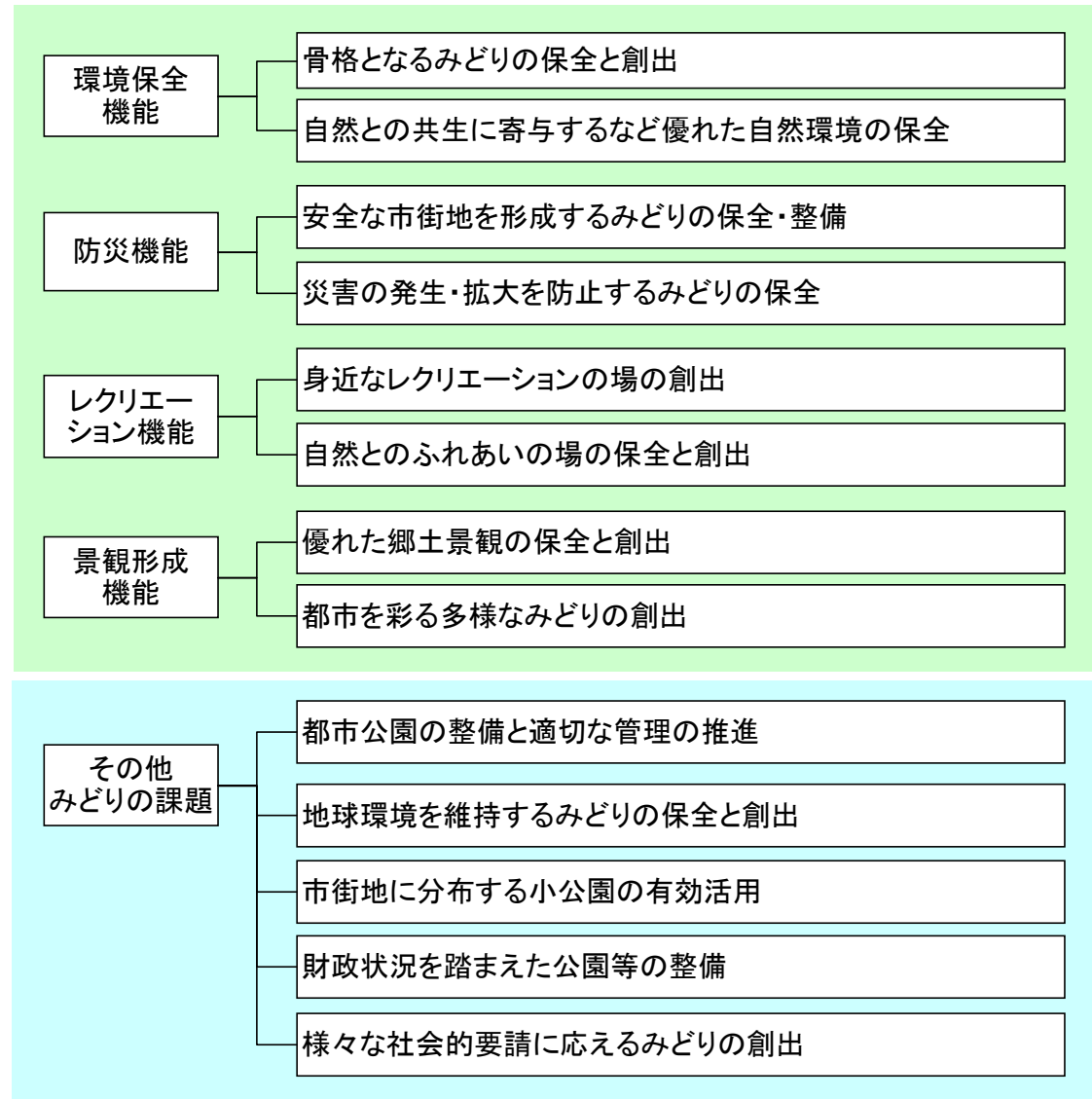
2.5 みどりに関する課題の整理

前項までの草津市におけるみどりの現況を踏まえ、第1次計画によるみどりの課題や、第5次草津市総合計画で提示されている課題と照らし合わせて、みどりに関する課題を整理しました。

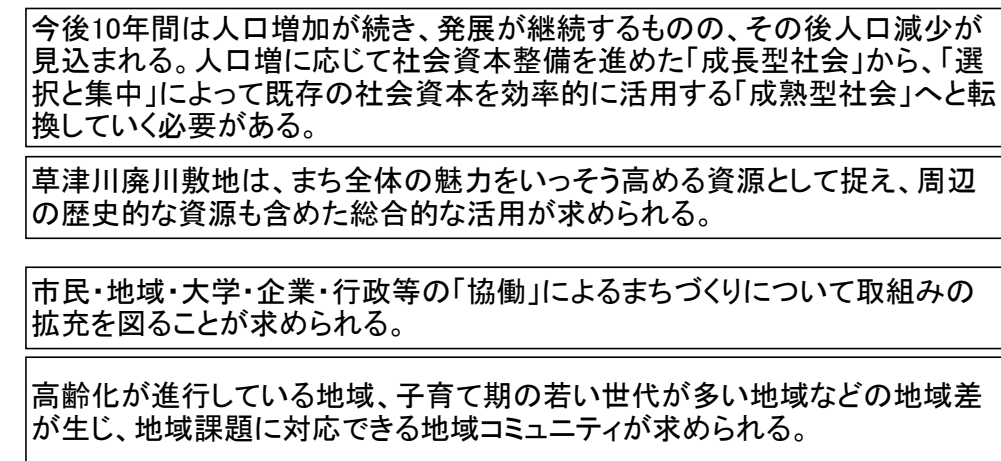
みどりの課題は、「守る」、「つくる」、「育てる」という3つの区分で整理することができました。



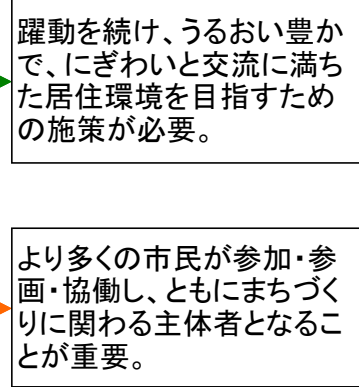
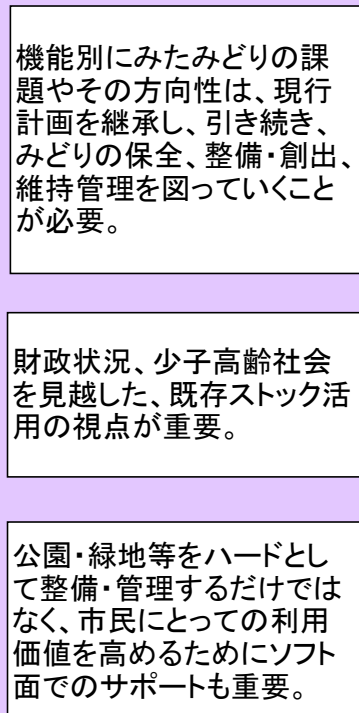
第1次計画によるみどりの課題



第5次草津市総合計画で提示されている課題



改定に向けた視点



みどりに関する課題

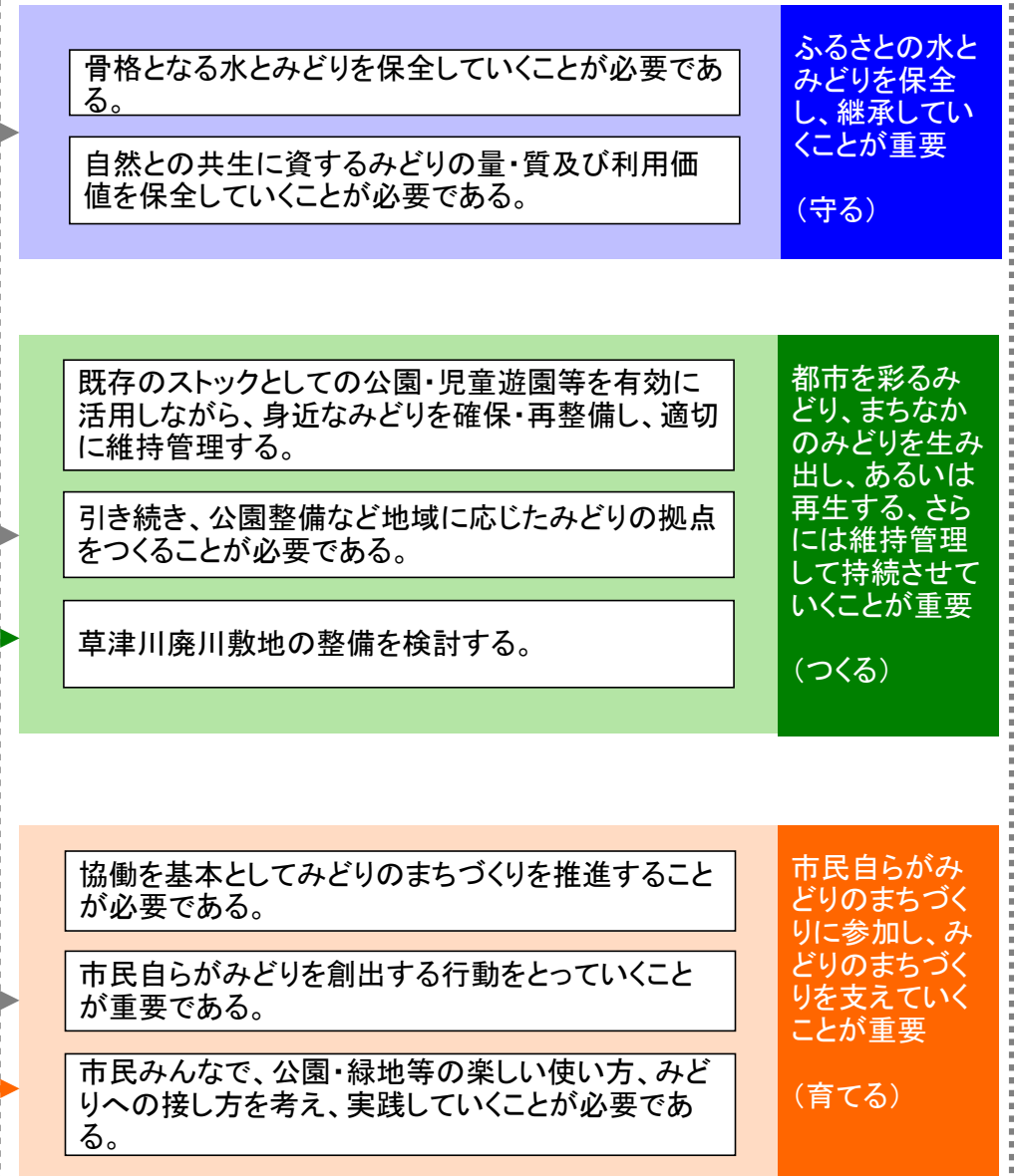


図2-9草津市のみどりの課題